

霞

—2016年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成28年7月5日発行(通巻第35号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(35)

古写真「大和町通りは舟でいっぱい」



昭和 16(1941)年7月の水害記録写真です。駅前通り(常陽銀行駅前支店付近)の道路は川のようになり、人々が舟で移動したり、2階からはしごを使って出入りする様子が確認できます。7月19日から23日にかけて関東地方に台風が上陸し、激しい雨をもたらしました。市街地から水が引いて路面が出るまでに2週間かかり、水田は約1ヶ月間冠水したままでした。
【情報ライブラリー検索キーワード「洪水」「水害」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(35)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【夏休みファミリーミュージアム他】
- 和同開珎(古代)・・・2
- 釈迦涅槃図(中世)・・・3
- 関流大筒の銘(近世)・・・4
- 真鍋国民学校の答辞(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「第37回特別展『まちのしるし—しるしが語る土浦の近代—』を見て」・・・8
- コラム(35)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

7月17日(日)・9月18日(日)両日とも14:00~(1時間30分程度)

テーマ:「弥生時代の^{ぼうすいしや}紡錘車」(7/17)・「古代の紡錘車」(9/18) 会場:博物館視聴覚ホール

【夏休みファミリーミュージアム】

★★ワンポイント解説会★★ おすすめの昔の資料を、学芸員がわかりやすく紹介します。

7月30日、8月6日・13日・20日(いずれも土曜日)11:00~及び14:00~の1日2回

展示品に関するクイズラリーも開催します。合格者には記念品をプレゼントします。

★★ミニ掛軸をつくろう★★ 7/5(火)~電話または直接申し込み。参加料1,000円(材料費)。

1日目(裏打ち)7月24日(日)9:30~12:00

2日目(表装)7月30日(土)または31日(日)(希望日を選択)9:30~15:00

★★亀城公園探検★★ 7/5(火)~電話または直接申し込み。入館料が必要です。

亀城公園内にある土浦城の建物や、石碑などをめぐります。

8月2日(火)10:00~11:30 親子10組

★★戦争体験のお話をきく★★ 7/5(火)~電話または直接申し込み。

土浦市内にお住まいの戦争体験のある方から、当時のお話を伺います。聴講無料(見学の際は、入館料が必要です)。

8月12日(金)①9:20~(疎開・空襲) ②10:30~(予科練) ③11:20~(学徒動員) 各回30人

※上記の他、「かすみ人形をつくろう」(8/4)、「親子はたおり教室」(8/19・8/20)などのイベントも開催します。詳しくは、当館までお問い合わせください。



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

わ どう かい ちん

和同開珎

—土浦から出土した古代のお金—

現代の私たちの生活において、日々の商品の売買や労働の対価として支払われるものにお金があります。このお金が仲立ちとなり、様々なものの交換が行われています。日本での貨幣の製造開始は古代にまでさかのぼり、本格的に製造・使用されたお金として和同開珎（「わどうかいほう」とも呼ばれます）があります。近年では、和同開珎に先立って発行された富本銭と呼ばれる貨幣の存在も明らかにされています。

和同開珎は、今からおよそ1300年前の和銅元（708）年に、律令により国を治めようとする政府によって製造され始めた貨幣です。その製造の目的は、奈良時代の都である平城京の造営にともなう多額の出費への対応と、国内への貨幣経済の浸透があったと考えられます。その材質は銅製のものがほとんどですが、銀製のものもあります。銅製のものは直径が2.4cm前後、重さは2.5gほどで、円盤の中央に四角い孔があき、表面に文字が刻まれています。その製作方法は、粘土と土で作った鑄型に溶かした金属を流し込む鑄造と呼ばれる技術で作られました。この形態と製作技術の特徴は、当時の文化的先進国である中国の唐で発行された貨幣と共通し、同国の貨幣制度を手本にしたことがわかります。

和同開珎は、北は北海道から南は熊本県まで全国の775遺跡から6,350枚が出土し、平城京跡がある奈良県内では2,400枚を超え、近畿地方で多く見つかっています。古代の常陸国にあたる茨城県内では、県南部の石岡市、つくば市、鹿嶋市などの5か所の遺跡で各1点ずつ合計5点出土し、このうちの1点が土浦市の常名にあった弁才天遺跡の発掘調査で出土しました。

弁才天遺跡では多数の竪穴住居跡が発見され、古墳時代から平安時代まで継続して営まれた市内でも数少ない集落跡です。和同開珎は銅製のもので、8世紀前半頃の竪穴住居跡のカマド付近から出土しました。この貨幣の表面は磨り減っておらず、製造された後に数々の人々の手を介さずこの土浦の地に運ばれ、カマドを廃棄する儀礼にともなって埋められた可能性が考えられます。古代の出土貨幣の多くは、商品との交換という本来の使われ方とは別に、まじないの道具としての役割が考えられています。平城京跡などから出土した和同開珎の多くは、用水路や井戸跡などから他のまじないの道具とともにみつきり、その性格をよく示しています。

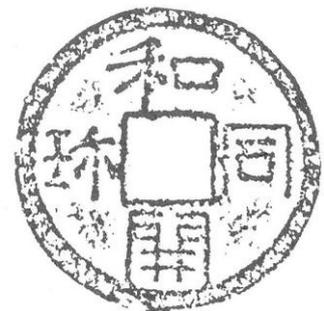
（関口満）



弁才天遺跡出土の和同開珎（表）



同（裏）



同拓本

8/20（土）11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 富寿神寶（石橋北遺跡）（当館所蔵）
- 神功開寶（扇ノ台遺跡）（当館所蔵）



しゃかねはんす
釈迦涅槃図

—動物絵画の宝庫—

画面の寸法が縦横約160cmもある大きな絵画で、大変見ごたえがあります。法雲寺（市内高岡）に伝来した涅槃図と呼ばれるもので、南北朝時代に描かれました。

涅槃図とは、釈迦が入滅する場面を描いたものです。修行と布教の生涯を送り80歳を迎えた釈迦は、インド北部のクシナガラ村で臨終のときを迎えました。その様子を描いた涅槃図は、命日の2月15日に寺院で行なわれる涅槃会^{ねはんえ}で本尊として掛けられてきました。

画面の中央には、寝台の上に右手を枕にして横たわる釈迦の姿が描かれています。その周囲には、釈迦の死を嘆き悲しんで集まった弟子や菩薩、仏を護る天部^{てんぶ}、俗人などがたくさん描かれています。釈迦の足に手を触れる女性、伏して泣く者、地面に転がる者など一様にその死を悼み^{いた}悲しんでいます。画面右上には天界から生母摩耶夫人と侍女が雲にのって駆け付ける姿も描かれています。

涅槃の場には、動物や鳥、虫たちもたくさん集まっています。中国などに伝わる古い涅槃図では、わずかにシシやサルを加えるか、動物を描かないものが多く、日本でも現存する最古の涅槃図（1086年制作、和歌山・金剛峯寺所蔵）ではシシが一頭描かれるのみです。それが、鎌倉時代以降では描かれる動物の種類と数が格段に増えます。この涅槃図にも30をゆうに超える数の動物や鳥、虫が描かれています。大きなものでは画面中央でひっくり返って悲しむ白いゾウ、その左下にはヒョウとトラ、小さなものではアリやカマキリまで画面右下に描き込まれています。甲羅のようなものを背負う姿で描かれる哺乳類（サイか？）など種類の同定が難しいものもありますが、さながら動物図鑑のようで、見る者の目を楽しませてくれます。中世まで遡る絵画でこれほど多くの種類の動物を描くものは涅槃図において他にありません。まさに動物絵画の宝庫といってもよいでしょう。（堀部猛）



「釈迦涅槃図」（法雲寺所蔵、茨城県指定文化財）

7/30（土）11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 足利尊氏書状（法雲寺所蔵、茨城県指定文化財）
- 法雲寺庄主寮年貢目録（法雲寺所蔵、茨城県指定文化財）



せきりゅうおおつつめい

関流大筒の銘

—「谷神」か、「尚神」か—

「大筒谷神と表示しているけれど、尚神と読むのではないですか？」関流砲術の大筒「谷神」を見た来館者から質問を2回、受けたことがあります。

関流大筒「谷神」「拔山銃」2挺は土浦市指定文化財となっていますが、この他に、火薬入、照尺、秘伝書や免許などの火縄銃関連資料をはじめ、土浦藩の要職を務めていた代々の当主らが残した武家文書が数多く伝来しており、実物と文書がそろった砲術家の資料として高く評価されています。

博物館では第5回特別展『火縄銃—関流砲術の冴えと奥義』(1990)を開催し、図録で「谷神」を紹介し、文字の金象嵌を「谷神 関内蔵之助知信 花押」と掲載しました。照尺(照準を合わせる器具)にも「谷神」とはっきり墨書され、これらを根拠にして「谷神」と紹介し続けてきました。谷神とは「万物を生み出す、深くて空虚なところ(=谷)にひそむ不思議な力(=神)」(出典『老子』)であると、「霞」16号でもご案内しています。ではなぜ「尚神」ではないのですかという質問があったのでしょうか。尚神は「神を尚ぶ」と読み、火縄銃の銘としても通ります。

原因は象嵌の篆書に潜んでいました。『篆刻字林』(服部畊石編・三圭社)で「谷」と「尚」を調べ、砲身の文字と比べてみました。「尚」とよく似ています(写真参照)。

古文書を調べてみたところ、詳細が「大銃象眼覚」(関家文書 A-425)に書かれていました。郡山藩の元医者が「老子道德経に元気を名付けて谷神不死の語あり、よって谷神の二字を銘すべき」と銘を選んでいました。「谷神」のほかに「最上砲」が銘の候補に挙がっていましたが、こちらは却下されたようです。ところが、これらといっしょに保管されていた象嵌の下書きには、篆書で「尚神」とありました。

「大銃象眼覚」では「谷神」なのに、篆書の下書きで「尚神」と書いてしまったのはなぜでしょうか。理由はわかりませんが、江戸時代の人々にとっても篆書は難解であり、取り違えてしまったのかもしれませんが。

冒頭に述べた、「尚神と読むのではありませんか？」と質問して下さったのは、ひとりには書道の先生で、もうひとりには印章店のご主人でした。日々篆書や篆刻に触れている方は、正確に「尚神」と読んでいたのです。来館者のご質問で、博物館も新たな発見をすることができました。(木塚久仁子)



「谷神(砲身部分)」(個人所蔵)



「谷」



「尚」

8/6(土)11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 大銃象眼覚(関家文書 個人所蔵)(近世コーナーに展示)
- 霞12号「関信藏肖像」・霞16号「土浦藩の関流砲術」
(「霞」バックナンバーは、1F休憩スペースで閲覧できます)



真鍋国民学校の答辞

—戦時下の卒業式での出来事—

昭和 20 (1945) 年 3 月 20 日、真鍋国民学校高等科の卒業式の当日、内野三郎さん（昭和 5 年生まれ）は、先生に職員室へ呼ばれました。恐る恐る行くとそこで渡されたのは、先生が書いた答辞の原稿でした。「お前、これを今日読むんだ。ここで 3 回練習しろ」。読むと「そんな小さい声で聞こえるか、馬鹿者」と怒られ、さらに 2 回、3 回と大きい声を出して読むと「それでいい。読み終わったらそれを校長先生のところへ渡して戻ってくればいい」と言われました。

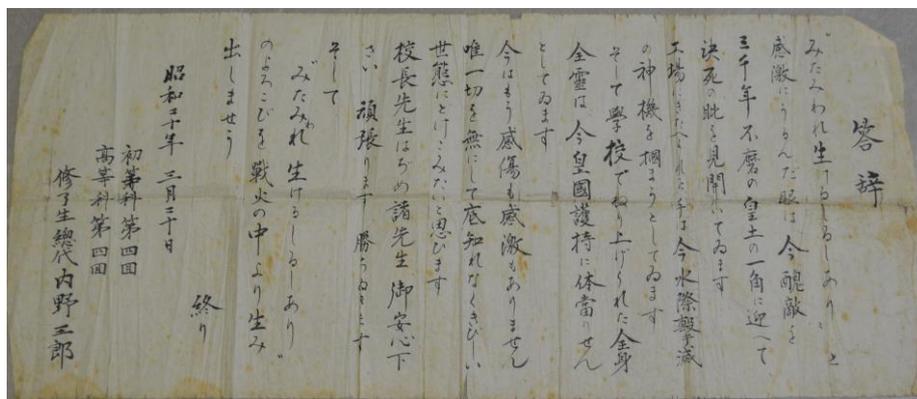
卒業式は初等科（昭和 7・8 年生まれ）と高等科（昭和 5・6 年生まれ）合同のもので、内野さんは修了生総代として答辞を読みました。読み終わった頃です。突然警戒警報が鳴り式は中断、先生の誘導で裏の鹿島神社の境内に避難することになりました。幸い学校は攻撃されず、警報が解除になったため卒業式は継続し、卒業証書が授与されました。

写真はその時の答辞の原稿です。急に避難することになったため、あわててポケットにしまったままとなり、式終了後も先生に返しそびれてしまったと内野さんは語ります。

答辞“みたみわれ生けるしるしあり”と感激にうるんだ眼は今醜敵を三千年不磨の皇土の一角に迎えて
 決死の眚を見開いています 工場にきたえられた手は今水際撃滅の神機を掴もうとしています
 そして学校でねり上げられた全身全霊は今皇国護持に体当たりせんとしています
 今はもう感傷も感激もありません 唯一切を無にして底知れなくきびしい世態にとけこみたいと思います
 校長先生はじめ諸先生御安心下さい 頑張ります 勝ちぬきます
 そして“みたみわれ生けるしるしあり”のよろこびを戦火の中より生み出しましょう
 ※一部現代かなづかいに改めています。

答辞には、はじめと終わりに「みたみわれ生けるしるしあり」（天皇の民である私は生きている甲斐があるものよの意）とあります。「天皇陛下のために死ぬよと叩き込まれた」と内野さんが語る戦時体制下の学校教育が凝縮されたものと言えます。夜中でも警報が鳴り、毎日落ちて眠ることもできないなか、内野さんたちは中高津にあった軍需工場（東京電機）へ 8 月 15 日の終戦まで通いました。（野田礼子）

※本稿は、平成 28 (2016) 年 1 月に内野三郎さんからお聞きしたお話を参考に記述したものです。



「卒業式答辞原稿」（当館所蔵）

8/13 (土) 11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 真鍋国民学校高等科修了証書（当館所蔵）
- 自転車所有者之証（第一海軍航空廠通勤用）（当館所蔵）



市史編さんだより

明治の地租改正—岡田家文書（土浦市大志戸）から—

今回は、平成 28（2016）年 3 月に刊行した『土浦の古文書 第 26 集』に収録された岡田家文書について紹介します。

岡田家は江戸時代には久右衛門を名乗り、旧大志戸村（以下、「旧」省略）の名主を勤めた家でした。明治以降は村会議員や学校長などを歴任しました。岡田家には 1,155 件の文書類と 105 件の書籍類が残っており、特に明治期の史料が 845 件あります。なかでも土地関係の史料が多く、残った経緯とそれらの史料の意味を考えながら、大志戸村における地租改正事業について見ていきたいと思えます。

茨城県では関東諸府県に先駆けて明治 6（1873）年 8 月に地租改正事業に着手し、7 年 10 ヶ月かけて同 14 年 6 月に完成しました（『茨城県史料 近代政治社会編 I』）。

大志戸村を含む新治地区の実体はどうだったのでしょうか。『図説新治村史』によれば、地租改正事業のため実地測量が実施され、図面に一筆ごとに地番と面積を記した「地籍図」が作成され、それに基づいて各戸に地券書が配布されました。地租改正事業は明治 13 年に完了し、同 19 年に登記法が公布され、同 20 年に実施、同 23 年に登記が完了して地券書が不要となった、とあります。

岡田家文書には、残念ながら地籍図は残っていません。しかし、作業初期の明治 7～8 年に作成された基礎帳簿と、明治 13～19 年に発行された 42 枚の地券書、同 17～20 年にかけて作成された地価修正に関する帳簿や野取図が多く残っています。

明治 7～8 年に作成されたのは「現歩縦横改証」（目録番号 72～76）と「地引帳」（77）、「（地租改正に係る件につき一括）」（79）などです。

「現歩縦横改証」は区画ごとに番号を付け、所有者名や江戸時代の土地等級などと共に、再実測された坪数などが記載されたもので全 6 冊の史料です（残っているのは 5 冊分）。「地引帳」は「現歩縦横改証」の再実測部分のみを 1 冊に集めた帳簿です。大志戸村では 1～1188 番の区画番号が付けられました。この 2 つの帳簿を見ると、初期の作業が江戸時代の実態をもとにしながら進められたことが分かります。「（地租改正に係る件につき一括）」には達書の写しや伺書とその指令が書き留められています。内容は、収穫の査定方法や地価取調帳の記載方法など基本的なものから、畦畔や墓所の扱いなど個別具体的なものまであります。実際に作業を進めていく過程で様々な疑問点が発生していることが分かります。

明治 17 年から 20 年にかけての史料は、「合併地々価修正取調書 付属野取絵図一筆限帳」（目録番号 376）、「誤謬地取調書」（377）、「開墾地願漏取調書」（382）、「地目変換届漏取調書 付属野取絵図一筆限り帳」（386）、「変換誤謬野取図控」（411）などの帳簿類です。さらに 28 枚以上の野取図（685～712）や、地価や地租金を持主ごとに書き上げた史料が 17 枚以上（718～734）残っています。野取図とは各区画ごとの大きさを書き込んだ図面です。簡易的なものですが、「野取絵図」と書かれた史料には一区画ごとに丁寧に図面が描かれています。初期作業から開墾や土地売買などがあり、実態は少しずつ変化していききました。それらを実態に合わせて記録していました。

土浦では地租改正に関する騒動の記録はありません。江戸時代からの地元の役人が着実に作業を進めていったからでしょう。岡田家は地主でもあったので、地券 42 枚のほか地租改正の関係史料を大切に保管していました。土浦市内では、飯田村の岡野家や、虫掛村の田中家、沢辺村の御田寺家などに地租改正関係の史料が残っています。ほかの史料群とも比較して見ていくと、さらに具体的な実態を知ることができるでしょう。

（市史編さん係非常勤職員 江島万利子）

地域と博物館

博物館と展示（3） ～改装に伴う展示の考え方～

土浦市立博物館は、昭和 63（1988）年の開館以来、地域史に関わる調査研究と資料の公開に努めてきました。常設展とともに、特別展や企画展など 100 回を超える展覧会を開催しており、市民への教育普及という観点から、展示は博物館の大切な役割のひとつです。しかし、地域博物館にとって第一義的な役割は何かと問われれば、地域に関わる歴史資料を収集保存し、永く後世に伝えていくことにあると考えます。地域に博物館が存在することによって、調査研究が進展し、そこには自ずと多くの資料が集積されます。かけがえのない地域資料を保存、継承するには、地域博物館が唯一の恒久的施設であり、その存在意義には多大なものがあると言えるでしょう。

一方、原資料を展示公開することは、長時間の照明などによって資料に少なからずストレスを与え、展示を継続すればするほど資料の劣化を促進することがわかっています。この問題は、展示施設として広く認知されながら、資料保存が第一義であり、優先されるべき博物館が抱えている大きなジレンマです。いずれにしても、博物館にとって必須な要件は、資料保存に充分配慮して展示公開が行われなければならないことにあります。

当館は開館 20 年目を迎えた平成 19（2007）年 7 月、従来の常設展示スペースを全面的に改装し、展示内容、施設ともに装い新たにリニューアルオープンしました。改装のねらいが、開館後に蓄積された、収集資料と調査研究の成果を展示活用することにあることは言うまでもありません。ただ、上記のような理由から、さまざまな資料をより整備された展示環境のもと、資料保存に充分に配慮して展示を行いたい、当館が考えた改装の最大のねらいはそこにありました。展示改装では、保存環境の整備と多様な収集資料の公開を目的に掲げました。展示替えしやすいように個別ケースをすべて排除し、温湿度管理に適したエアタイト（密閉）型の大型壁面ケースを採用し、より良い展示環境で柔軟に対応できる構造に改装しました（写真参照）。まずは資料の保存を優先し、長期展示を避けるため、常設の展示を 3 ヶ月（季節）ごとに展示替えすることにしました。また、構造的に展示替えしやすいだけでなく、展示構成にも柔軟性を持たせたことにより、将来的にも新たな収集資料や調査研究成果を展示に容易に反映できるようになり、展示資料の新陳代謝と保存に、より一層の効果を発揮することが期待されます。

展示施設という側面からも、常設展示室、特別展示室と呼び分けてきた既成の枠にとらわれない新しいかたちの展示室に再生することになりました。「常設展示」という呼称から受ける半ば固定化されたイメージを払拭すべく、資料保存に端を発した「更新される展示」という考え方を提唱し、「常設展示」の呼称にかえて「総合展示」という名称を採用しました

[参照：「土浦市立博物館の展示改装と新しい取り組み」『土浦市立博物館紀要』第 18 号 2008 年]。 (塩谷修)



エアタイト型の大型壁面ケース

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、柴沼醤油醸造株式会社の顧問で柴沼家17代当主の柴沼和廣さんに寄稿していただきました。

第37回特別展「まちなしーしーしーが語る土浦の近代—」を見て

今回の特別展は、土浦並びに常総地域の醤油醸造業にも多くスポットライトが当てられており、実に興味深く拝見いたしました。現在も土浦で醤油醸造業に携わる私共にとってありがたく嬉しいことでした。

元和2（1616）年、ヒゲタ醤油が和歌山県から銚子（千葉県）に移り醤油醸造を始め、続いてヤマサ醤油が興り、そこに醤油原料の大豆・小麦を納めるようになった土浦藩の庄屋・柴沼家も元禄元（1688）年には自ら醸造を始め地元蔵として地位を固めたと当家には伝えられております。

今回の特別展には、醤油醸造の図や道具、ラベルや醤油工場平面図等、醤油業界にいてもなかなか目にする事の出来ない貴重な展示物が沢山有り、私はそこから古き時代の先駆者達の醤油醸造に対する思いや創意工夫を感じることが出来ました。

嘉永6（1853）年の「関東醤油番付」では、土浦の大国屋勘兵衛や色川三郎兵衛の醤油品質に匹敵する関口八兵衛（鳩崎）、辻田忠兵衛（江戸崎）らの名前も見受けられ、江戸時代に良質の大豆（赤菘）、小麦（生娘）を生産していた筑波山周辺の穀倉地帯に思いをはせながら、家の記録が後世に残る事（残す事）の重要性を強く感じました。関口八兵衛家は明治22（1889）年のパリ万国博覧会にも出品し、アメリカやイギリスに醤油を輸出していたことを今回初めて知りました。我が社でも昭和の終わりになって国際線機内食めんつゆの製造を始め、平成になって海外の展示会や醤油輸出も行っていますが、明治初期にパリ万国博覧会に出品しビールやソースの製造も始めるなど関口家の企業家精神、センスに驚嘆し励まされました。

連携講座「常総地域に広がる醸造業の歴史」における各地の調査員や学芸員からの江戸崎、土浦、八千代、佐原地区の醸造業の解説は分かり易かったです。

土浦だけでなく常総地域、千葉県の醤油醸造のしるしまで幅広く展示された土浦市立博物館の学芸員の皆さんの努力に心より感謝申し上げます。
(柴沼醤油醸造株式会社顧問 柴沼和廣)

コラム (35) 常総へのまなざし

「常総」という言葉は我々の生活に溶け込んでいます。常総市、常総線、常総を冠した私立学校もあります。江戸時代の常総とは利根川水運によって結ばれた地域で、常陸南部から下総北部にかけて、国の境界を越えて広がっています。色川三中（1801～55）が編纂した古文書の資料集に「常総遺文」全7巻があります。三中は公家・武家の歴史ではなく、自ら生活している常総の民衆の過去を年貢や土地の古文書から解明しようとしたのです。三中に影響され、常総の国学者らも古文書や史跡、金石文を調べて地域史を解明しようとした。

土浦の歴史を解明するには常総という広がりが必要だと三中が教えてくれたのに、博物館ではなかなか常総地域史の視点を持ち得ずにいました。ようやく、特別展「まちなしーしーしー」の記念行事において、連携講座「常総地域に広がる醸造業の歴史」を開催することができました（平成28年4月24日）。江戸時代の醤油醸造業を常総地域という広域で論じる場となりました。
(木塚久仁子)

情報ライブラリー更新状況

【2016・7・5現在の登録数】

古写真 562点（+5）

絵葉書 474点（+5）

※（ ）内は2016年5月14日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2016年度

夏季展示室だより（通巻第35号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック（背景）

は、博物館2階庭園展示です。

2016年度夏季展示は、2016年7月5日（火）～9月25日（日）となります。「霞」2016年度秋季展示室だより（通巻第36号）は、2016年10月4日（火）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。